

今日立つものたち

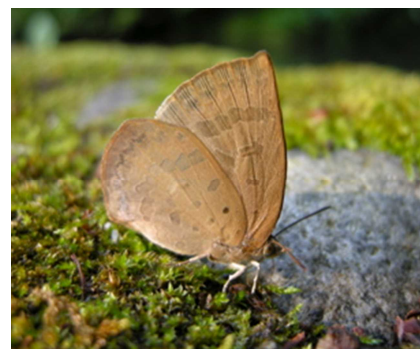
1. 地味なムラサキシジミ

初冬の寒さを感じるようになった中、小春日和の日に出会うシジミチョウです。シイやカシの樹冠をキラキラ光りながら飛びまわるためよく目立つのはウラギンシジミですが、同じシイやカシの葉上から飛び出すもののすぐ止まってしまう、ガのように感じるのがムラサキシジミです。そのせいか、成虫の食べ物がわかっていません。今いる成虫は越冬しますので、体力をつけるため何か食べているはずですが、花にはほとんどきませんので蜜が主ではないようです。幼虫はシイやカシの葉を食べています。



翅を広げたムラサキシジミ

寒くなると、晴天の日だまりで翅を広げて体温を上げるための日光浴をしているところに出会えます。広げて3cmばかりの翅の裏はうす汚れた茶色ですが、表は鮮やかな青紫です。日向で飛ばば紫色がチラチラするのですが、暗い場所で飛ぶことが多いため、じっくり色をみることはこの時期です。太陽に向かう方向から近づき、日陰を作って日光浴の邪魔をしないようにして観察しましょう。この時期は近づかせてくれるはずですよ。



ムラサキシジミの翅裏

2. カラタチバナ

冬に緑の葉と赤い実が付き、縁起ものとされている植物は、万両：マンリョウ、千両：センリョウ、百両：カラタチバナ、十両：ヤブコウジ、一両：アリドオシです。いずれも暖地の広葉樹林の下層に生育する数十cmから十数cmの強い光を嫌う低木ですが、打吹山に自生しているのはマンリョウとカラタチバナ、ヤブコウジです。打吹山のマンリョウは白実のものがあるなど、栽培種の種子が鳥によって運ばれたと思われる生え方をしています。鳥の腸を通過することで発芽が促進されるのです。いずれも日本原産の種ですが、カラタチバナは「唐」という伝来を示すような名前をつけられています。理由は不明です。

これらの種は、江戸時代に盛んに育種が行われ、多くの園芸品種が作り出され高値で売買し、取引禁止令まで出された植物です。100以上もの葉の斑入りや縮みなど、形態の突然変異を選抜して固定されました。その技術や遺伝子蓄積は世界に冠たるものでしたが、明治以降多くの品種が失われてしまいました。園芸店ではさまざまな品種が販売されていますが、打吹山の暗い樹林下で見られるカラタチバナは原種なのです。



カラタチバナ



ヤブコウジ